The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	若狭の古社寺巡礼
Author(s)	鳰, 遠江
Citation	懐徳. 1978, 48, p. 47-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90568
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

若狭の古社寺巡礼

鳩　遠　江

四月二十九日の祝日は小雨もよいの日になってしまった。

集合地の国鉄湖西線近江今津駅からは小浜への若狭街道をバスの旅である。重苦しい雲間から今し方こぼれ落ちた涙雨に駅前は濡れていたが憧れの若狭への旅立ちに私の心は弾んでいた。

若葉に彩られた街道を走る。今は二車線の国道三〇三号線で心地よいスタートである。山峡の保坂を左にとれば比良山系の西側安曇川に沿うて京都への街道である。これから水坂峠を越え幾重の山並みを見ながらうねうねと下って行くのであるが、この辺は車窓に黄色い山吹が咲乱れ高い山にも名残りの山桜が見え所々のこぶしの木は枝一ぱいに真白い花をつけて満山新緑の中に浮き上って見える。面白いことに峠を相当下った処が県境で最初の集落が熊川というところである。今津・小浜間の若狭街道はその里程から九里半街道とも呼ばれ熊川は丁度真中辺に位置しているので昔は近江からと若狭からの品物の交換地として市場が立ち宿場として賑わったのだそうであるが今は静かな一村落である。こゝからはもう小浜湾に流れ込む北川に沿うて流域は少しずつ開け田圃も畑も散見し細い旧道も三〇三号線の右に左に見え隠れしながら続き、単線の国鉄小浜線が上中駅に向って南下し西に曲り国道と平行して、二本のレールが小浜駅へと延びている。

今日拝観する社寺は総べて昔の遠敷の地にあり、遠敷は古代から若狭の中心地で国衙が又国分寺・国分尼寺が置かれた所であったが戦国の乱世以後活気の失われた土地となってしまったのだそうである。「おにゅう」という言葉の響きは何となく心惹かれる地名である。

明　通　寺

近江今津駅から約五十分で着く。国道の標識から左へ入り山襞の奥深く巨杉の並ぶ俗塵を離れた静寂幽邃の地

にある。足元には胡蝶花の白っぽい花が乱れ咲き、松永川という清流に懸る朱塗りの橋が新緑の楓に覆われて美しい。若狭に初めて足を踏みしめた実感に渡る橋は非常に楽しい。渡り終ると頭上に楼門を仰ぐ。四十段の石階の上である。夢中で登る。右手が本坊で低い石垣が続き、左手は参道に沿うて曲水を流しその向うは山の斜面に石とさつきの散策庭園が造られて紅い蕾がちらほらほころびはじめている。ここだけは木立が伐採されてパァーッと明るい。若狭自然歩道の標柱が見える。

本堂へは更に三十段を登る。石段の上では若いお坊様が合掌して出迎えていて下さり感激であった。段を上りきると眼前の更に高所に写真で見たあの三重塔が。ホォー、すばらしい!! 皆さん口々に感歎詞の連発である。先づ本堂へお参りする。

周囲の蔀戸は全部閉され外光を遮った堂内はうす暗い。二抱えもあろうかと思われる素朴な縦長の二張りの「献燈」と筆太に書かれた大提灯のみが内陣を明るくしている。大らかな内陣である。外陣も広く、その周りを更に磨かれた板の間が取り巻いていて両袖が局の間になっている。天井は化粧屋根裏で内外陣は組入天井である。眼が馴れて来て正面の三軀の尊像にびっくりする。思わず射すくめられた感じで板の間に坐り込んでしまう。中央の穏やかな薬師如来の坐像を両脇から何と恐しい異形の像がお守りしていることか。何れも怒髪天を衝く御丈二・五米余の大男。しかし立派な彫りのお像に魅せられて畳の間の外陣へと上りだんだん前に進み出る。三軀とも藤原時代の優品。慈悲慈善のこの薬師様は高さ一・五米に近い一本造りで刳りがないのに割れ目のない珍しい美しい尊像、右脇の降三世明王は三眼四面八臂、三界三世の三毒を調伏し仏法に帰依させる真言密教明王部の東方の守護神で足下に大自在天とその妃を踏み付けた珍しいお姿。頭上に髑髏を頂き腹部に童女面を挿し左胸前で衣を大きく結び左足を一歩踏み出して半身に構えた手には三叉戟と蛇を持つ変った形相のしかも堂々たる深沙大将は大般若経の護法神といわれ、鎖国の禁を犯してインドへ仏典を求めに行かれた玄奘三蔵法師を、沙漠の中から現れて守護されたという。明快なお坊様と先生の御説明に近づき難い恐しい尊像にも親しみが湧いて来た。殊に重要文化財に指定されている深沙大将は全国にたった三軀しかないと伺い興味は更に深まった。

明通寺略記によると

延暦のむかし、この山中に一大槲樹（ゆずり木）あり、その下に世人に異なる不思議な老居士が住んでいた。たまたま坂上田村麿公、ある夜、霊夢を感じ老居

士の命ずるままに天下泰平、諸人安穏のため、大同元年（八〇六）このところに堂塔を創建し、居士また椀の木をきって、薬師如来、降三世明王、深沙大将の三体を彫って安置したと伝う。云々」と

これは比叡山の相応和尚が比良山系の葛川谷で修業中、地主明神が老翁となって現れ、その夢告により三の滝で不動明王を感得し、感激のあまり御体に抱きついたところ、これは一本の桂の古木であった。不思議な霊木であると和尚は三軀の不動明王像を彫り三所に祀ったと伝えられている明王院創草の説話と同じで、この時代霊木信仰が行われていたのだそうである。

三重塔を仰ぐ。亭々と聳え立つ杉木立に囲まれて、檜皮葺の何とも軽やかで端正な、しかも風格を持つ塔であろう。一直線に張りつめた軒先でなく僅かな垂るみを持って自然に両端の軒反りに流れる線や、二重の繁垂木の軒の深い和様建築が一層の華麗さを感じさせるのであろうか。この日塔の内部拝観は出来なかったが、私は十数日後再度このお寺を訪れるチャンスに恵まれ初重内部を拝することが出来た。正面は釈迦三尊、裏側には阿弥陀三尊が祀られ、四天柱とその扉に極彩色の十二天像が描かれ、古色に充ち満ちた建築群の中の一番華やいだ場所であり周囲の若葉に映えて美事であった。元禄時代に描かれたもので近年の修理で塗り替えられ一層鮮やかになったのだそうである。

同じ檜皮葺で蟇股の美しい本堂と共に鎌倉時代の建築で国宝のこの塔は若狭に残る唯一基だけのもので「十三世紀の輪奐の美を御想像下さることが出来るでしょう」と宇野先生の感慨を籠めたお言葉であった。

客殿持仏堂の不動明王も堂々たる立像である。藤原時代の穏やかなお姿で、これから訪ねる羽賀寺の十一面観音と毘沙門天との三尊の一つであったのが明治初年このお寺に移り祀られているのだそうである。

中食をここで済ます。お茶の御接待を戴く。天然記念物の樹齢五百年といわれる榧の老木を仰ぎ名残を惜しみつつ退出する。

若狭彦神社へ

国道へ戻り国分寺址の森を右手に眺め遠敷川を渡り左へ入ると、すぐ若狭姫神社であるがバスの中で拝し若狭彦神社へ向う。三分位で着く。

スカッとした神社特有の灯籠の立つ社前、直線に補装された参道に浄域を感じさせる。その参道の途中に椿の大木があり一面の赤い落ち椿の美しさに見とれ最後尾になって先生の御説明を聞き逃す。失礼しました。

すっきりした檜皮葺の白木造りの奥床しい社殿、額く

と自ら森厳の気漲り神鎮まります背後の山容の美しさに心打たれる。上社がこの若狭彦神社、下社が若狭姫神社で男神女神が分離祭祀されるのは伊勢神宮と同じで古代の祭祀思想によるものだそうである。又奈良東大寺二月堂のお水取りに関係ある遠敷明神はこの二神のことで、この社前の道を山手へと辿ればお水送りの行われる神宮寺や鵜の瀬に到達することが出来る。又の日是非訪れて見たいものである。

多田寺へ

バスは再び国道へ出て次の山襞の清らかな多田川のほとりの地道をゆっくり走る。両側に山は迫って緑が一際鮮やかな幽水境である。人家もちらほらと山に依り添い温もりを感じる里である。

荒れた仁王門を入ると御住職が鐘を撞いて迎えて下さる。松や桜の大木が疎に参道の両側に並び何段かずつの石段の上に瓦葺の本堂が建つ。そのまま一歩堂内に入れば庶民の信仰のお寺らしく賽銭箱や大香炉、鍔口からの太い綱も下り内陣との境の格子戸には祈願札やいろいろのものがぶら下り高い梁や柱には千社札がべたべたと貼られた香煙の漂よう薄暗い外陣である。私達は内陣でつぶさに尊像を拝ませていただいた。御本尊の薬師如来像は風貌のゆったりとした何とも愛らしいぬうぼうとしてこだわりのない親しみのあるお顔で立っていらっしゃる。台座からお躰まで一木彫成の九世紀の貞観仏で太くどっしりとして親指のつけ根の肉の盛上りも大きい。京都神護寺の薬師如来像のスタイルに似ているという。脇侍として祀られている二軀の観音像はスマートで製作年代を少し異にしているが十一面観音像は、奈良薬師寺の聖観音・日光月光二菩薩の金銅仏の衣紋に類似しているとのこと、何れも地方仏の特色が濃厚であるがその彫りの様式は奈良仏師の流れを感じ、平城文化と若狭文化を結ぶ造形芸術を見せてくれる唯一つの遺産なのだそうである。その他に須弥壇上の小柄な彩色の四天王像も胴太でありながら躍動的ですばらしい。お厨子を中央にして両側の高い段上には十二神将も控えておられる。須弥壇そのものもまた立派で欅造りでどっしりと重量感があり木目も美しく艶があって、これもお寺の御自慢であった。更に内陣右脇陣の花頭窓の中には上段に一軀下段に二軀のにぶい金泥の阿弥陀坐像が祀られている。上品下生の来迎印を結んでおられ大きくて立派な円満相の慈悲のお姿である。今は廃寺となった御本尊であったということである。二十軀に余る沢山の尊像は「多田のお薬師さん」と親しまれながら、これからも人々の篤い信仰に守られていくことであろう。私達は何時までも見送って下

さる御住職の温いお心に守られて車に戻る。

若萠えの木々は一層美しかった。

妙　楽　寺　へ

三度国道に出て今度は南川堤防上の京都へ通ずる一六二号線を暫く上り標板に従って左へ逸れ田圃を横切り山裾の駐車場へ。

本坊を囲む石積みの参道は美しい。両側は楓の木で、重なり合った葉の中に点々とほの赤い若芽の混る新緑のトンネルをぬけると、「大悲閣」の額の懸った二天の守る楼門である。門を潜ると昼尚暗い杉木立の参道で山を背にして本堂は鎮もっておられる。自然に流れる檜皮葺寄棟造りの美しい屋根、正面両側は連子窓で、左右の入口は桟唐戸、中央は格子戸になっている福井県では最古の鎌倉時代の建物だそうである。内部は和様で外陣の化粧屋根裏の紅梁の上を、やや平たいが形のよい板蟇股が支えている。内陣との境は菱欄間と格子戸で厳重に仕切られていて、ボンボリ様の灯明台が二基ぼんやりと内部を照らし出している。中央お厨子の中の御本尊は二十一面の化仏を頂く三面の千手観音で全国でも余りお目にかかれない珍しい尊像である。私は先年京都東福寺西側の伏見街道に面した法性寺で二十七面観音を拝したことがある。同じ等身大で優しいお顔で非常に珍しく感じたことを覚えている。再び似通った尊像を拝し喜ばしい。光背の唐草透し彫りもまた巧みである。両脇壇高所の千手観音の眷族の二十八部衆の小像も賑やかである。美しい建築の本堂と慈悲の珍しい尊像と、ここでもまた見送って下さる心温い御住職とにお別れした。

駐車場の前方はずーっと開けて晩春の此処の空気は清らかであった。向う遙かの山なみが低く重なり合って見える、これから訪れる羽賀寺はどの辺であろうか等と思う。左方一番近くの走り出の美しい緑濃い山が万葉集や枕草子に謳われた後背山であることを私はあとで知った。どんよりと雲の厚い空ではあるがどうやら心配していた雨に見舞われることもなく一日過ぎそうである。

羽　賀　寺　へ

バスは一旦小浜駅に出て市役所前を通り南川と北川を渡り、海側を走る山脈の内側を進む。集落の途中の山の奥にお寺はある。車を降りて驚いた。八重桜の真盛りである「奇麗ーい」一同感歎の声である。造幣局の通り抜けはもうとうに終った後であるだけに二度のお花見の出来た歓びは格別であった。暫く見事な桜のトンネル、あとは杉木立に覆われた森閑とした参道。少々のざわめきも吸込んでしまう。石段を登ると前庭を広く、ここも山を背にして本堂が建っている。真中に灯籠が一基。入母

屋造り檜皮葺の屋根、蔀戸を廻らした王朝風の建物である。外陣は先刻の妙楽寺に全く似ているが蟇股が大きく少し鑿跡のあるのが変っている。時代は下って室町の建築だそうである。

有名な国宝の彩色の十一面観音様はもう目の前にいらっしゃる。私はここへ着く前からわくわくしていた。今日の見学が定った時から嬉しく思っていた。それは再会だから。昨年の観音菩薩展の時奈良博物館で修理の終ったばかりのあでやかなお姿をおそばに拝したのである。「固唾を呑む程のなめらかな肌をもつ観音様」と誰かが書いておられたが凛然として才媛を思わす面立ち、幅広い天冠台を頂く彩色豊かな十一面観音様。再会の歓びを噛締めた。やはりこの観音様はこうしてここのお厨子の中に、この美しいお堂の中にいらっしゃるのが相応しいと思った。寺名も鳳聚山羽賀寺、鳳凰がその美しい羽を落した霊地として創建されたという由緒の深いお寺である。岩波書店刊行の「日本思想大系第二十巻寺社縁起」の収録に「本浄山羽賀寺縁起」として詳しい解説がなされている。両脇の重要文化財の千手観音像と毘沙門天像の二軀は明通寺の不動明王像と共に三尊として明治初年廃寺となるまで松林寺というお寺に祀られていたのだそうである。其の他には地蔵菩薩像二軀が坐っておられ彩色の剝落が激しく傷ましいお姿であったが寄木造りの実態を拝見出来て有難かった。須弥壇の背面の高所には観音様の三十三化身像が祀られている。大変珍しく拝観した。

本堂斜め前の空洞のある大銀杏の老木も上方に小さい扇形の濃緑の葉を沢山つけ、その後方の一叢のれんぎょうは橈んだ枝に黄色い花を一ぱいに付けて揺れていた。本堂前からは彼方の山並みが木立の僅かの隙間から眺められる。

これで予定の見学は全部了り帰路に付く。時計は午後五時に近かったが名残りは尽きなかった。

古、若狭は大陸からの門戸で文物が奈良へ京都へと運ばれた。文化の匂いはここにも止まり千数百年大切に伝えられて、こんにち海のある奈良として皆の憧れの的となっている。今日私達の訪ねた古社寺は穢れ知らぬ山の奥に静かに息づき尊像はつい最近まで秘仏としてお厨子は開けられず、村の人達でも拝むことが出来なかったそうで、それだけに傷まず尊さそのままに美しいお姿を拝ませていただけた事に感謝しなければならない。

初夏の訪れと共に生業の営みは早々と田植を終えた若狭路である。バスは近江今津駅へとひた走る。

前号（四十七号）「近江路見学の記」訂正

五二頁上段三行目　若冠二十八歳→(正)若冠十八歳

五三頁上段四行目　京極道誉→(正)京極高頼